

---

# 破天荒少女

安比奈

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

破天荒少女

### 【NZコード】

N5357A

### 【作者名】

安比奈

### 【あらすじ】

家に帰ると知らない人がいた！誰だよアンタ！？その日から日常が破天荒なものになっていく！目指せラブコメディ！（予定）主人公かなりの妄想癖を持つてます

鍵が開いてたんだから泥棒って思つてもいいじゃない

「じゃーね佐奈。気をつけて帰るのよ」

「はーい」

「変な人についていつちやダメよ。帰つたら手洗いつがい忘れずに  
するのよ」

「あなたは私のお母さんか」

「母親がわりよつ」

「大丈夫だつて。じゃ、部活頑張つてネ」

「おうよ」

父親は生まれてすぐに死んだらしい

それから14年間、女手一つで育ててくれた母親も去年、交通事故  
で死んだ

母親が私の通帳にお金をたくさん残してくれたから高校を卒業する  
までの学費や生活費は十分ある

一人ぼっちになつてからおばあちゃんがよく家に来てくれたけど、  
おばあちゃんがギックリ腰になつてからは私が風邪とかひかない限  
りは来てもらわないとした

淋しくないつて言つたら嘘になるけど、私にはおばあちゃんも友達  
もそばにいてくれた。だからこそ母親を亡くしたショックから早く  
抜け出せたのだ

いつもの日常は、学校が終わると直ぐに帰り、広告をチェックして  
から買い物にいく。

お金があるつていつも無駄使いして底をつかせるなんて母親に申  
し訳ない

唯一の贅沢としては住んでる所を変えてない事だ

なんか無駄に豪勢なマンションに生まれた時から住んでいる  
家賃は高いかも知れないけど思い出がたくさんつまっているし近所

関係をまた一から築いていくのは苦手な事だ  
家に帰ると玄関の鍵が開いている

「アレ？ なんで…？」

おばあちゃんが来てるのかな？？他に開けられる人なんていない  
「ただいま。おばあちゃん来てるのー？」

しかしリビングから出てきた人は私の祖母ではなく

「お帰りなさいませ。ご主人様」

この現代において、そろそろみない服装をしたカツコイイお兄さん  
だった

だから疑われるような事するからそんなこと言われるんだよ。

んーと、話を振り返ると

『学校から友達と別れてお家に帰ると知らないお兄さんが

「お帰りなさい」

つて言つてくれましたとさ』

めでたしめでた…しじゃないつ…!!

まず、誰…なんでここにいるの…?どうやつて入ったの…?

「どうなさいました?上がらないのでですか?」

「えつ…あつハイ上がります」

つ小心者の私が初対面の人質問攻めになんてできるわけないじやない…!

「愛用のスリッパはどれでござりますか?」

「え?」

スリッパの趣味を聞いてるの?正体はスリッパー!?(スリッパの

形動詞。作、私)

「これですか?」

「ハイ」

つて知らないスリッパーに私のスリッパを教えてしまった!チクショーワはうでるのスリッパー!

「お手をどうぞ。」(主人様)

……そういえばさつきもご主人様つて言われたような…?聞き間違い?てか、手を差し出されても…。

試練?これは試練かしら?

これは流れにそつて手を乗せてスリッパをはくべきなの?

やつたらやつたでドン引きされて、あげくの果てにはどつきりカメラーとか言って写真撮られて学校にばらまかれたりするの??あるいは、手を乗せたが最後そのまま誘拐!?ちょっと待つてよ!

私を誘拐しても払つてくれるべき親は一人とも存命ではないのよー。  
あーじゃあこの場合誘拐じゃなくて強盗なのかな

「佐奈様?」  
「気分でも悪いのですか?」

オウツ美しい顔がどアップにつ

「なつんでもないです」

「そうですか。」

いつまでも玄関に突つ立つて いる訳にはいかない。  
勇氣をだして聞いてみた

Q・貴方は誰ですか

A・貴女の専属執事です

…つて執事いい!??

外から帰つたらすぐに手洗いついをしまじょう

執事つて…何?

あれだ。めえ～つてなく…それは羊  
え、何?もしかして今、巷で流行つてアレ?

メイド喫茶があるから執事喫茶も みたいなノリで友達が行きたい  
つて言つてたあの執事?だいたいがセバスとかそんな名前のあれ?

「えつと…」

「混乱なさつているみたいなので詳しい話は中で話しまじょう」「  
そつ言つてリビングに通される

いや、私の家なんですけど

リビングに入るとなんか変な感じがする

「どうぞ」ソファに座ると高そつなカップに入つた紅茶を差し出さ  
れる

だから私の家なんですけど

しかもこんなカップ持つてない!つて事は執事さんの持ち物?

フツそうか、中に睡眠薬とか入つてて眠らした後にお金を奪つつて  
寸法ね!?

残念だけどお金は必要最低限しか持つてないのよ。財布の中に入つ  
てるのはせいぜい5千円ぐらいで…

「飲まないのですか?あ、それとも紅茶はお嫌いでしたでしちゃうか  
?」

「あ、飲みます」

私は所詮NOと言えない日本人よ  
「お砂糖は?」

「5個で」

「多いですね」

「甘党なのよ」

それでもちゃんと5個入れてくれる

あ、いい香り。カップも高そつなら紅茶も高いのかな？紅茶なんて  
リップオンしか知らないわよ

「それでは事の始まりを簡潔に申しあげます。」

あ、美味しいー。こんな紅茶初めてだわ

「貴女は隠し子です」

ブフツ

紅茶噴射

もつたいない…じゃないつ！

「今…なんて？」

「貴女は隠し子です」

やつぱり聞き間違いじゃなかつたのね

今時そんな手にひつかかる方が珍しい

はいじゃ次は隠し子ってなんでしょう

1隠れんぼしてる子供

2神隠しにあつた子供

3なんでも隠す子供

4浮氣したら子供がドキドキやつた 隠しちゃえ

「……で？」

「4です」

1番外して欲しい答えをいただきましたー

「えつ…だつて、お母さん…そんなの一言も…」

「奈々さんがまだ存命の頃は佐奈様も幼く意味も理解出来なかつた  
でしょ?」「う

そーですねー。

つて待て待て、流されるな私!さつきまでの私を取り戻すのよつ  
確かに私のお母さんの名前は奈々だ。それ以前にあのほえほえして  
た母親が浮氣だなんてつー?

「それじゃ貴方は私が隠し子であるのとなんの関係があるんですか  
つ」

まさかお母さんの浮氣相手が「」の羊さん(違)なのー?そつにえれば  
お父さんの遺影とか今まで見たことなかつたし…

「私は貴女のお父様に雇われ、佐奈様の世話係でもある執事の者で  
す。佐奈様を本家にお連れする為にお迎えに上がりました」

「…本家??」

「本家です」

いや、本家つて何?そんなたいそれたもんなの?

「つてかお迎えって…」

入った時から薄々気付いてたけど…

「はい。明日から本家に住んでいただきます」

「この部屋の荷物が家具以外なくなつてゐる」

「ちょっと待つてよ！？そんなの急に言われたつて…」

「嘘でしょつカメラビデオよ。カメラカメラ！カメラでこいつ

「佐奈様？何を探してゐんですか？」

「あ、いえ。眞実の術を見いだすべく…」

「どつきりカメラを探してますなんて言えない…つ

「ああ…信じれませんよね。急にこんな言われても」

「はい。だから嘘なん…」

「ですので本家に来て下さー」

話のこしを折られたつ

「あたし、ここを引っ越すつもりはありません」

引越しして欲しけりや隣人に布団叩きの名人を連れてこい

「今日は戻つてきますから」

こつなつたら駄々をこねてやる

「いやだ

「顔を会わしたらすぐに帰つてもよろしくいらしこので」

「嫌だー」

「行きますよね??」

「いや…だ」

「そんなんに嫌ですか??」

「嫌です」

「いいでしょつ?」

「嫌です」

「いいでしょつ」

「嫌です」

「嫌でしょつ」

「いいです」

「アレ???

「さあ行きましょつ」

…つはめられた！！

世の中には言つていい事と困る事がある

執事についてわかつた事

なかなかのS。

前回、見事な口車に乗せられYESSと言つてしまつたが、それでも渋つていると執事は手慣れた手つきで私を担ぎあげ下に止めてあつた車にほうり込んだ

ちょっと恐怖と殺意を覚えた

「拗ねないで下さい。ご主人様」

何がご主人様だ

「私、貴方の主人になつたつもりはないんだけど」「これからずつとそつけない態度でいてやる

「そうですね。まだ正式な任命は受けてないです」

「てか、あんたの名前聞いてない」

やつぱりこいつ誘拐犯じゃないの？？

「口が悪いですね。いけませんよ？まあ、私が一から教育して差し上げますが…（薄笑）

「このサドつ

「…………」

あつ…つい思つた事を口に出してしまつた…

怒つたかな？やだなー。走行中の車からほうり出されたりするのかな

「アレ？よくわかりましたね？では改めまして佐渡圭介です」

当たつちゃつたよーつか性格に正直な名前だなワイ！

ふと窓の外を見ると木で囲まれた大きな公園みたいな所のそばを走つていた

しかし公園の割に遊具がなく子供もいな

綺麗な噴水があるだけ

「ああ、つきましたよ。」

「え？？」

公園の回りを見渡すが国立図書館みたいな建物以外見当たらぬ  
反対側は商店街の入り口と道路しかない

「え、どこ？商店街？」

「逆ですよ」

頭を掴まれ逆を向かされる

さつきから気付いていたけどこの執事、私の扱いだんだんひどくな  
つてきてないか？？

「アレです」

執事が指差したのはさつきの図書館

「あれ図書館でしょ？え、遠回しに勉強しろって言つてる？」

「遠回しもなにも勉強はしてください。違いますよ。あれが本家。

第一邸宅になります」

「へえー。で、誰ん家？あんた？」

あんな大きな家見たことないわ。さてはこの執事、金持ちだな

「…貴女の家ですよ」

そつかああたしん家があー…………つて！

「ミシ…ミー！？」

動搖して思わず英語

それに便乗して執事も英語で

「イエス」

やたら大きな門をくぐり、さつきの公園が本家だといふことがわか  
つた

## 迷子の小猫より犬のお巡りさんの方が泣き虫

「はい。私は誰。

体育館ほどある広い空間  
いや、広すぎでしょ。扉多すぎ。窓多すぎ。  
家と呼ぶにはでかすぎるこの屋敷に圧倒されながら何とか自分を見失わないのでいた

「佐奈様。先に部屋に行かれますか？それとも貴女のお父様にお会いになりますか？」

「お父…さん…」

そういうえば、なんで今頃になつて私の父親が名乗り出たのか。  
母親が死んでから一年が過ぎた  
こんなにも大きな家なんだから母親が死んだなんて情報はすぐに入つたハズ

なんでいまさらになつて…

「会う。生まれてこの方会つた事ない父親とやらに会つてやる」  
そして直談判してやる。とりあえず、ココに住むなんて「冗談じやない。

でも、そしたらコノ執事がくつついで離れなくなりそう

うわあ嫌だ。ずっと一緒になんて

「何か失礼なこと考えてません？？」

「いえ。ナニモ」

心を読まれた！？いや、顔に出た！？

「…まあいいでしょ。ではついて来てくださいね」

「ハイ

右側の5つ目の扉を通ると長い廊下になっていた。少し先に大きな

甲冑があつた

スゴイ…本物かな？てか、普通にこんなのが置いてあるのがス

ゴイ

「遅れないで下さい」

気付けば立ち止まっていたみたいで執事が結構離れたところにいた

「ねえ、アレ本物?」「

執事に追いつくと尋ねてみた

「ええ、本物です。中世のヨーロッパの・・・この後は血なまぐさい話になりますけど、ききますか?」

「止めとく」

言つておぐが私は怖い話やグロイ話が大嫌いだ。なんでつて眠る前に思い出してもつと怖い想像をしてしまう(妄想癖だから)

「曲がります」

十字路を左に曲がる

少し進んでまた丁字路にあたる

「なんか迷路みたい」

だつて十字路とかありえなくない?

「迷路ですよ」

「え?」

今なんと?

「迷路なんですよ。佐助…旦那様の趣味でしてね。泥棒対策でもあります」

つまり方向音痴の私に迷えということとかしら

「佐助?」

「貴女のお父様のお名前です」

「ふうん・・・つー?」

「どうしました?」

前を見ると廊下の前方に大きな黒い犬らしき物体

「いいいつ犬!?」

「ああ、アントワネットですよ。アントワネットー!」

「よつ呼ぶな!私が犬嫌いって知つての行動!??てか何ソノお菓子みたいな略し方!」

「いっ・・・」

近づいてくる大きな物体。でかい、田茶苦茶でかい  
何食つたらそうなるんだよ！？  
とりあえず・・・怖い！

「イヤアアアア！」

「ちょ・・・どこ行くんですか！？」

体を180度回転し全速力で走る

＝執事と離れる

＝迷子

全くもつて見知らぬ風景  
とりあえず叫んでおく

「リリはまだコー！私はまだコー！？」

迷子の小猫より犬のお巡りさんの方が泣き虫（後書き）

一つの話がだんだん長くなつてきてる気がする

## 逃げるが勝ちって言葉もあるよ

まあーお庭に蝶々がいるわーわあー綺麗なお花だとーアハハウフ  
ファヒヤヒヤヒヤ…

うん。現実逃避してみても何にもならない  
とりあえず「」はどこ?方角すら分からぬ  
てか、こんなにもでかい屋敷なんだからお手伝いさんの一人や二人  
すれ違つてもいいと思うんだけど  
いままでにすれ違つたのなんか鎧と絵画しかない

迷路の基本の右手を壁につけて歩くという方法をしたが同じところ  
をくるくる回つてると気付いき、一度としないと誓つた。ちなみに  
同じと気付いたのは15回田だ

一人になると母親が死んだときを思い出してしまう。家はテレビ  
だつてあるし、近所の人もよくしてくれるから寂しくないけど、  
「」は知り合いが誰もない

執事がいるといないじゃこんなにも違つなんてしゃくだが今はすご  
くそばにいて欲しい…気がする

「また逃避しよかな?メルヘン系はさつきやつたし昼メロ系も火サ  
ス系もやつたしな…」

「君、だれ」

「えつ…」

振り返れば美青年。久しぶりに見る人間。やつとたどりついたオア

シス(大袈裟)

しかしオアシスの水は腐つてたみたいだ

「名前は?なんでこんな所にいるの?てかどうやって入つたの?メ  
イド…にしては若すぎるか。何歳?小学生?」

うあ、私が執事にしたかつた質問を躊躇いもなく聞いてきやがつた  
しかも小学生じやない!童顔はお母さんの遺伝よ!

「あんたこそだれ。先に名乗りなさいよ」

少しきつめな口調で返す

理由は少し執事に似てるから（顔立ちとか背格好とかが）反抗するとは思つてなかつたらしく少し驚いた顔をする

「僕の名前は東条奏汰。この家の一人息子であり次期当主であり東条グループの全てを担う者さ。それで、君は？」答え次第じや警備を呼ぶからね？」

一人息子…って事はこの家のお坊ちやまか。どうりで偉そなんだ

「私は…」

「佐奈様！」

背後から執事の声が聞こえた

何故か逃げなくなつた

「奏汰様！ 佐奈様を捕獲して下さい！」

「お前、佐奈つて名前か。」

左手首を掴まれる。てか捕獲つて私は動物園から逃げだしたワニか

「佐奈様… 急に逃亡なさるので搜索に苦労しましたよ」

すごく冷たい視線を浴びせる執事。怖いから。

「こいつ、脱獄犯かよ」

そして的確なツッコミをありがとづ。

「いえ、佐奈様は佐助様の隠し子…つまりは貴方の妹ですよ」

「へえ… いもう… つて妹！？」

つまり、私のあ… つて兄！？

逃げるが勝ちって言葉もあるよ（後書き）

あれ、奏汰のモデルはトニスの〇子様のA部K吾だったのに

## 聖徳太子はす」い耳を持つてたようだ

ただいまの気分

『動物園の動物』

素敵な視線を感じながらもただ今大ブレイク中の佐奈です。毎日のレッスンは厳しくて泣いちゃう事もあるけど頑張つて練習してますつそれでは聞いて下さい  
私のデビュー曲『このまま現実逃避し続けてもいいかな?』

話が進まないので現実を見ます

視線で人が殺せるなら私は即死します

まず執事からはよくも手間かけさせやがつてというとつても冷たい視線を感じます。正直痛いです。視線で殺せなくても外傷が付きそうなほど痛いです

一方、兄っぽい人物は好奇心溢れた視線を向けて来ます見定める視線です。つまりは上から下まで満遍なく見てきます。これが兄妹という関係でなく上司と部下ならセクハラで訴えれると思います。

これを友達に言つたら美形一人に囲まれて羨ましいと言いつつですが、あいにく私にとつては兄と執事ですしかも今日会つたばかりです

設定としては萌えるかも知れませんが主人公としては萌えれませんとりあえずこの妙な沈黙を破りたいと思います

「あの……」

「へえ、コレがあの奈々さんの」

「ええ、似ておられるでしょう?」

「言われてみればそつくりだな」

あれれえ?沈黙を破つたのは私なのに私の言葉は無視? (「〇〇ン君

風に)

「佐奈様。旦那様の所へ

「疲れた」

「この家広すぎなんだよ。疲れてないあんたがすごい

「佐奈。俺の事、奏汰お兄ちゃんまつて呼ん

「嫌よ」

お兄ちゃんまつて何。てかあんた何者だよ。

「それならこれからは急にいなくならないで下さい。私がどれだけ探したと思ってるんですか。それに…」

「なんでだよ。呼べよ。だいたいお前は…」

うあつW説教！？

てか一人一緒に喋るから何言つてるか聞き取れない  
逃げようにも奏汰さんに手を掴まれてるから逃げれない  
どうしようもないから黙つて聞いているフリをしてると前から、つまり一人の背後から人がやつてくる

「あ……」

もしかして…この人…

「「聞いてるんですか？（のか？）」」

「何をしてるんだい？」

その人の声に勢いよく振り向く一人

「お父様…」

「旦那様…」

奏汰さんの父親って事は

「楽しそうな声が聞こえてね。君は……佐奈かい？」

私のお父さんなのかな

話が大きく逸れて一回転して元に戻るところらしいな

旦那様（お父様）が現れた  
佐奈は逃げるを選択した

「どうして貴女はいつも逃げようとするのですか」

執事にばれた

佐奈は逃げ切れない

「さあご主人様

「佐奈はお嬢様だろ」

「ここで兄の鋭いツツ」「///

ソコニだわるとこ？」

「ああそうですね。お嬢様、貴女のお父様ですよ」

ノリでだいたいわかつてたけどそう言われたら少しは緊張する

「父…親…ですか」

深く知らない私は父親＝母を捨てた極悪非道人間としか見てない  
「お父様」

「どうしたんだ？いつも態度がでかいのに…熱もあるのかい？」

「べつ別に佐奈の前だからかしこまつてる訳じゃねえぞっ…違うからなつ」

これなんてツンデレ？

てか、キャラ濃いなーここいらでキャラ紹介しといた方がいいんじゃないの？」

「今更じゃありませんか、お嬢様」

執事のくせに心を読むな

「キャラが大幅に変わりますよ」

久しぶり過ぎて作者自身忘れてんのよ  
つてか小説に作者だしちゃダメでしょ

「佐奈様が小説とか言ってる時点で物語りが狂ってきてますが  
じゃキャラ紹介だけいつとこー

まずは（カツコイイ）執事  
つて何カツコイイ付けてんのよ

「いけませんか？」

性格、ナルシスト。

執事としてはプロなんじゃないの？知らない？  
「最高ですよ」

あーはいはい。んでクール…？？

「なんで疑問系なんです」

クール＝ツツノミツテいつ私の方程式式が…私、ツツノミツテる気がする…

「ああツツノミまじょうか？グーヒペービツヒがいいですか？」

殴ること前提！？

ま、いいや次！兄の奏汰！

「私の名前は紹介してくれないのでですか

あー…えー…たしか…佐渡さん…？

「忘れてましたね」

そつそんな事ないヨー

「怪しいです。怪しついでに次回に続きます」

続けるの！？

「その間ヒジヒツトお話しまじょうか、佐奈様♪」

や…ちよ…

終わらないでえええつ！

続くのに続くので続くとき続ければ

前回のおわり

ある日、家に帰つたら部屋に…

「そこからいきますか」

えーでつかい屋敷に連れてこられ父兄と召乗る人間に出会いました

「おおざつぱですね。どうしました」

そつちこせじうした。ちゃんとツツコミ入れてるじゃん

「貴女の言動に苛立ちを覚えたので」

これ本当に執事?失礼すぎね?

ま、いいやキャラ紹介ね

兄??の奏汰さん

「また疑問ですか」

だつて血の繋がりあるのか本当にわかんないし似てないし似てますよ

えー…

「嫌なんですか」

私、妙なところでツツコミ入れるようなキャラじゃないし

「それは奏汰様がオタクだからです」

わー衝撃の事実ー

「にしては棒読みですが」

どつちかってと笑劇つて感じ

「失礼では」

あんたに言われたくない

つてか全然話が進まないじやん!何の陰謀だよ!

「奏汰様はIQが200あります」

またどうでもいい事実を

「出会つたばかりのくせに奏汰様の何を知ってるんですか!?

あんたは何キレしてるんですか!?

「キレイませんよ」

あんたのその顔でそのネタ止めて  
てかもう執事が奏汰さんの紹介したらいじやんか

「奏汰様は、高校の生徒会長です」

あーそんな感じはするわ。つてか金持ちの坊ちゃまのセオリーだよね  
「女性にもてます」

カツコイイっちゃカツコイイもんね

「オタクです」さつき聞いたし。なんでそこをブッシュするの  
「後はシスコンです」

へえ奏汰さんに兄弟いたんだ。一人っ子かと

「一人っ子ですよ」

え？

「貴女を含めれば二人兄妹です」

…何もいうまい

「以上です」

まあ隨時追加していけばいいか

次一父親

「旦那様は…」

ぶつちやけると何も決まってない

「なんで出したんですか」

知らないわよ。過去の作者に聞いて

「あ、旦那様と私は小さい頃は仲悪かったです」

何その事実！？

「ま、これもまた次回」

またこのタイプで終わんの！？

「焦らすのが好きなんです」

う、うわー（ 、 、 ；）

校長な話は声としゃべり方に問題があるから退屈なんだ

あれは私がまだ小学生の頃でした

私は旦那様と従兄弟でこの屋敷に事情があつて住んでいた時期がかつたのです

その時の当主だった旦那様のお父様、つまり佐奈様の御祖父様のご好意により私は不自由ない生活を送つておりましたしかし、それをよく思わない人もいた

メイドにも党閥があり、私はその一派に入られなかつた理由は单なる嫌がらせだと思う

メイド達のストレスのはけ口に私はどうする事もできなかつた居候の身ゆえにおじ様に文句を言えばこの家を追い出されてしまつ

幼い私は孤独という恐怖に敏感だつた

そして、比べるようにして旦那様…つまり佐助様が私よりも何倍も贅沢な優遇をされるのを、私は醜くも嫉妬してしまつた嫉妬は惜し気もなく憎しみに変わつた

同じ屋敷にいながらも私は佐助様を避けるよつになつた同じ空間に居ながら一言も会話をしない

そんな生活が3ヶ月続いた頃に変化は訪れた

「話についてきりますか」

「長い。ぐだぐだ」

「何を今更」

「もつかいまとめると、帰るとあんたが家にいてでっかい家につれてこられて兄とか父とかにであつてらちがあかないから執事の昔話

なんか出して流れを変えようとして

「でもぐだぐだに」

「所詮ギャグを田舎してんだからあんたのしんみりした話なんかいらないわ」

「失礼ですね」

「流れを本格的に変えましょ！」

「これぞ今更」

「いいのよ！ ギャグなんだから！」

「ギャグといふ言葉に全てを任せすぎでは」

「うつせいいわねー。あんたは執事つてキャラたつてんだからいいじゃない！ 眼鏡つけるかコラ！」

「ハッ私に萌えを求めてらつしゃつて？」

「ちょっとなんでそんな強気で行くのよーアンタはやられキャラで行きなさい！」

「ええ、なんかもうお嬢様のキャラにやらられ気味ですよ」

「じゃ次から新説・破天荒少女つて事で」

「ここまでがキャラ立ちしてないのに話を進めようとしたからぐだぐだになつたんですよ」

「敬語つて逆にいらっしゃるの知つてる？」

「もちろんん」

「ならヨシン」

校長な話は声としゃべり方に問題があるから退屈なんだ（後書き）

変わります。変わりたいです

「で、よ」  
キャラ立ちして勢いがあるひびきの言ひ方

「なんですか」

「正直、主人公がボケってのは辛いものがあるの  
ツツコミの方が心理描写しやすいって理屈  
ボケの考へてる事はわからないってのもあるけど

「それで」

「変わつて」

よしつ言つた！言えた！

正直、ここで喋るぐらいなら口に出した方がいいとか思つてたのよね  
読心術は当たり前だし

「嫌です」

「なんですよ！いいじゃない！つか今までぐだぐだつたのはあん  
たが意味不明だつたからでしょ！」

何考へてるかわからないつて…娘に冷たくされた親父の心境かつ  
「それは確かにそうですが、私にツツコミが出来るかどうか

「まさかのツツコミ放棄！？」

待つて、主人公の佐奈はボケしか出来ません  
てか破天荒少女つてタイトルなのに破天荒じやなくなるじゃない  
つてかほかにツツコミがないじゃない！…

兄！？まさか父にやらすの！？無謀すぎるよね？？

「ほら、考へてる内にだんだんぐだぐだに…」  
わかつてゐる。わかつてゐるが…

「お前が言つなあ！…」

ちやぶ台をひっくり返したいわーつて佐奈がツツコミこねちゃつた  
し！

「なんのよアンタ！ツツコミじゃないの…」

「え…」

「そこで困惑した顔をするなあ

ダメだ！このままじゃ繰り返しだ！

そうなつたら俺のターン

「トライップカード発動！！視点を強制的にチョンジーにつからせ執事視点！これ決定！もうかわらない！」

「そんな子供みたいに…」

大声で叫ぶ佐奈様を尻目に紅茶を煎れ始める  
あ、皆様はじめまして執事視点です

何故紅茶を煎れているのかと申しますと興奮した佐奈様を落ち着かせる為にお茶でも飲んで…といつ訳にござります

「視点を奪つた途端急に黙り混むなー」

佐奈様自体、視点交代に不安の種が消えたのか落ち着いてきた様子

ならこの紅茶いらぬか

「ちよつあんた天然！？普通無言で飲み干さないでしょ！執事が喋れば喋るほどキャラが独り歩きして尚且つ歪んだ方向にフルマランンなんだけど！」

「独り歩きのフルマラソンですか

率直な意見をズばりと

「…………」

すると黙り混むお嬢様

「佐奈様？」

「それよ！それ！その的確なツッコミー…」

心なしか輝いてらつしやる

「賢いはずなのに体からアホっぽいオーラが出てたのよ…やればできるじゃない！」

「そうですか。それなら私も言いたいことが

言つても言いだろうか

いや、言わなきゃ話が終わらない

「キャラ変わりましたね  
「アンタが言うか」

## どうあえず決着つけようや

「で、よ」

また同じ入りで話を展開しようとするお嬢様  
この人、頭が弱いのでしょうか

「あんたが何を考えてるか分からぬけど見下したよつた田でみんな  
んでくれない？」

思ったことが顔にでていた模様  
執事としてまだまだです

とりあえず、場面の展開をしましょう  
今まで眼中になかった父兄はどうじょつもなくせこに佇んでおられます

「圭介・・・キミ、執事のくせに主人のボクを無視するのかい？」  
二人の世界を抜け出したのが分かつたサスケは執事に文句を放つ  
父親のキャラでさえ決まってなかつたから仕方ない

「今私の主人は佐奈様ですので」

そういうて佐奈の肩に手を置く執事

嫌そうな顔する佐奈

「いつからそんな口答えするよつになつたんだい」

この主人、言うことがBしくさい

なんてことは思つても口にしません

Bしを狙つてる訳じやないので

「クフフ」

佐奈様が怪しげな笑いをしました

ちょっとと佐奈様の性分が垣間見れた気がします

「ならここで話をつけましょつ。佐奈様はここに住居を置きたくな  
いそうです」

このセリフに娘は頷き、父親は顔をしかめ、兄は駄々をこねる

「えー！住んでよー！」

「いやです」

佐奈様の一刀両断。奏汰様は泣きそうだ

「えつ・・・」

正直いい年なんだから直ぐに泣くのはやめていただきたい

そして父親も嫌な顔で私を見てこないで欲しい

どうしてこの家の男子はまともではないのだろう

「私は今の生活を崩したくないんです」

そしてイキナリ話始めた長女

とりあえず次に回しましょうか

この話

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5357a/>

---

破天荒少女

2010年10月12日02時52分発行